

さいかち淵

宮沢賢治

青空文庫

八月十三日

さいかち淵ぶちなら、ほんとうにおもしろい。

しゅつこだつて毎日行く。しゅつこは、舜しゅんいち——なんだけれど

も、みんなはいつでもしゅつこという。そういわれても、しゅつこは少しも怒おこらない。だからみんなは、いつでもしゅつこしゅつこという。ぼくは、しゅつことは、いちばん仲なかがいい。きょうもいっしよに、出かけて行つた。

ぼくらが、さいかち淵およで泳いでいると、発破はつぱをかけに、大人おとなも来るからおもしろい。今日のひるまもやって来た。

石神いしがみの庄助しょうすけがさきに立つて、そのあとから、練瓦場れんがばの人たちが三人ばかり、肌ぬぎはだになつたり、網あみを持つたりして、河原かわらのねむの木のところを、こつちへ来るから、ぼくは、きつと発破はつぱだとおもつた。しゅつこも、大きな白い石をもつて、淵ふちの上のさいかちの木にのぼつていたが、それを見ると、すぐに、石を淵おとに落して叫さけんだ。

「おお、発破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめて、早くみんな、下流しもへさがれ。」そこでみんなは、なるべくそつちを見ないようにながら、いっしよに下流の方へ泳いだ。しゅつこは、木の上で手を額ひたいにあてて、もう一度どよく見きわめてから、どぶんと逆さかさに淵へ飛とびこんだ。それから水を潜くぐつて、一ぺんにみんな

へ追いついた。

ぼくらは、淵の下流しもの、瀬せになったところに立った。

「知らないふりして遊あそんでろ。みんな。」しゅつこが云いった。ぼくらは、砥石といしをひろつたり、せきれいを追おつたりして、発破はつぱのこなぞ、すこしも気がつかないふりをしていた。

向むこうの淵きしの岸きしでは、庄助しょうすけが、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて、砂利じやりの上すわへ座すわつてしまった。それからゆつくり、腰こしからたばこ入れをとつて、きせるをくわいて、ぱくぱく煙けむりをふきだした。奇体きたいだと思つていたら、また腹はらかけから、何か出した。「発破はつぱだぞ、発破はつぱだぞ。」とペ吉きちやみんな叫さけんだ。しゅつこは、手をふつてそれをとめた。庄助しょうすけは、きせるの火

を、しずかにそれへうつした。うしろに居た一人は、すぐ水に入つて、網をかまえた。庄助は、まるで電車を運転するときのように落ちついて、立って一あし水にはいると、すぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこんだ。するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして、水はむくつと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきいんと鳴った。練瓦場の人たちは、みんな水へ入った。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」としゅつこが云った。まもなく、小指ぐらいの茶いろなかじかが、横向きになつて流れて来たので、取ろうとしたら、うしろのほうで三郎が、まるで瓜をすするときのような声を出した。六寸ぐらいある鮎をとつて、

顔をまっ赤かにしてよろこんでいたのだった。「だまつてる、だまつてる。」しゅつこが云った。

そのとき、向うの白い河原かわらを、肌ぬぎはだになつたり、シャツだけ着たりした大人おとなや子どもらが、たくさんかけて来た。そのうしろからは、ちようど活動写真かつどうしゃしんのように、一人の網あみシャツを着た人が、はだか馬のに乗つて、まっしぐらに走つて来た。みんな発破の音を聞いて、見に来たのだ。

庄助しょうすけは、しばらく腕うでを組んで、みんなのとるのを見ていたが、「さつぱり居いないな。」と云った。けれども、あんなにとれたらたくさんだ。練瓦場れんがばの人たちなんか、三十足ひきぐらいもとつたんだから。ぼくらも、一疋か二疋なら誰だれだつて拾ひろった。庄助は、

だまつて、また上流へ歩きだした。練瓦場の人たちもついていった。網シャツの人は、馬に乗つて、またかけて行つたし、子どもらは、ぼくらの仲間にはいろいろと、岸に座つて待つていた。

「発破かけたら、雑魚撒かせ。」三郎が、河原の砂つばの上で、ぴよんぴよんはねながら、高く叫んだ。

ぼくらは、とつた魚を、石で囲んで、小さな生洲をこしらえて、生き返つても、もう遁げて行かないようにして、また石取りをはじめた。ほんとうに暑くなつて、ねむの木もぐったり見えたし、空もまるで、底なしの淵のようになった。

そのころ誰かが、

「あ、生洲、打壊すところぞ。」と叫んだ。見ると、一人の変

に鼻はなの尖とがつた、洋服ようふくを着きてわらじをはいた人が、鉄砲てつぽうでもない槍やりでもない、おかしな光る長いものを、せなかにしよつて、手にはステッキみたいな鉄槌かなづちをもつて、ぼくらの魚を、ぐちやぐちや搔かきまわしているのだ。みんな怒おこつて、何か云いおうとしているうちに、その人は、びちやびちや岸きしをあるいて行つて、それから淵あせのすぐ上流の浅瀬あせをこつちへわたろうとした。ぼくらはみんな、さいかちの樹きにのぼつて見ていた。ところがその人は、すぐかわに河をわたるでもなく、いかにもわらじや脚絆きやはんの汚きたなくなつたのを、そのまま洗うというふうに、もう何べんも行つたり来たりするもんだから、ぼくらはいよいよ、氣持きもちが悪わるくなつてきた。そこで、とうとう、しゅつこが云つた。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。
いいか。」

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生せんせ云うでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、びっくりしてこつち
を見たけれども、何を云ったのか、よくわからないというようす
だった。そこでぼくらはまた云った。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、云うでないか。」鼻はなの尖とがった人は、すばすばと、
煙草たばこを吸うときのような口つきで云った。

「この水呑むのか、ここらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」鼻の尖った人は、少し困ったようにして、また云った。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、あわてたのをごまかすように、わざとゆっくり、川をわたって、それから、アルプスの探険たんけんみたいな姿勢しせいをとりながら、青い粘土ねんどと赤砂利あかじやりの崖がけをななめにのぼって、せなかにしよった長いものをぴかぴかさせながら、上の豆まめ 畠はたけへはいつてしまった。ぼくらも何だかき気の毒どく

なような、おかしながらんとした氣持ちきもちになつた。そこで、一人
 ずつ木からはね下りて、河原かわらに泳ぎおよついて、魚を手てぬぐい拭ぬぐにつつん
 だり、手にもつたりして、家に歸つた。

八月十四日

しゅつこは、今日は、毒もみの丹たんぼん礬ばんをもつて来た。あのトラ
 ホームの眼めのふちを擦こする青い石だ。あれを五かけ、紙つに包つんで持も
 つて来て、ぼくをさそつた。巡査じゆんさに押おえられるよと云つたら、
 田いなから流ながれて来たなと云えばいいと云つた。けれども毒もみは卑ひきよ
 怯うだから、ぼくは厭いやだと答こえたら、しゅつこは少し顔かいろを變か

えて、卑怯でないよ、みみずなんかで、だまして取るよりいいと云つて、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかつた。その代りしゅっこは、そこら中を、一軒ごとにさそつて歩いて、いいことをして見せるからあつまれと云つて、まるで小さなこどもらまで、たくさん集めた。

ぼくらは、蟬が雨のように鳴いているいつもの松林を通つて、それから、祭りのときの瓦斯のような匂のむつとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に行つた。今日なら、もうほんとうに立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、みみずくの頭の形をした鳥ヶ森も、ぎらぎら青く光つて見えた。しゅっこが、あんまり急いで行くもんだから、小さな子どもらは、追

いつくために、まるで半分馳かけた。みんな急きいで着物きものをぬいで、淵ふちの岸きしに立つと、しゅつこが云いつた。

「ちやんと一列れつにならべ。いいか。魚浮ういてきたら、泳およいで行いつてとれ。とつたくらい与やるぞ。いいか。」小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押おしあつたりしながら、ぞろつと淵かこを囲かこんだ。ペ吉きちだの三、四人は、もう泳およいで、さいかちの木の下まで行いつて待まつていた。

しゅつこが、大威張おおいばりで、あの青いたんぽんを、淵かこの中に投なげ込こんだ。それから、みんなしいんとして、水みづをみつめて立たつていた。ぼくは、からだか上流かみの方かたへ動うごいているような気持きもちちになるのがいやなので、水みづを見みないで、向むこうの雲うみの峰みねの上うへを通とほる黒くろい鳥とり

を見ていた。ところがそれからよほどたつても、魚は浮いて来なかつた。しゅっこは大へんまじめな顔で、きちんと立って水を見ていた。昨日^{きのうはつぱ}発破をかけたときなら、もう十疋も^{びき}とつていたんだと、ぼくは思った。またずいぶんしばらくみんなしいんとして待った。けれどもやっぱり、魚は一ぴきも浮いて来^こなかつた。

「さっぱり魚、浮ばないよ。」^{さぶろう}三郎が叫^{さけ}んだ。しゅっこはびくつとしたけれども、まだ一しんに水を見ていた。

「魚さっぱり浮ばないよ。」ペ吉が、また向うの木の^い下で云^いつた。するともう子どもらは、がやがや云い出して、みんな水に飛^とび込^こんでしまった。

しゅっこは、しばらくきまり悪^{わる}そうに、しやがんで水を見てい

たけれど、とうとう立つて、

「鬼おにっこしないか。」と云った。「する、する。」みんなは叫さけんで、じゃんけんをするために、水の中から手を出した。泳およいでいたものは、急いそいでせいのところまで行つて手を出した。しゅつこが、ぼくにもはいらないかと云ったから、もちろんぼくは、はじめから怒おこつていたのででもないし、すぐ手を出した。しゅつこは、はじめに、昨日きのうあの変へんな鼻はなの尖とがつた人の上つて行つた崖がけの下との、青いぬるぬるした粘土ねんどのところを根ねつこにきめた。そこに取とりついていれば、鬼は押おさえることができない。それから、はさみ無しなの一人まけかちで、じゃんけんをした。ところが、悦治えつじはひとりにはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼に

なつた。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走つて、喜作を押えたもんだから、鬼は二人になつた。それからぼくらは、砂つぱの上や淵を、あつちへ行つたり、こつちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼つこをした。

しまいにとうとう、しゅつこ一人が鬼になつた。しゅつこはまもなく吉郎をつかまえた。ぼくらはみんな、さいかちの木の下に居てそれを見ていた。するとしゅつこが、吉郎、汝、上流から追つて来い、追え、追え、と云いながら、じぶんはだまつて立つて見ていた。吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追つて来た。みんなは淵へ飛び込む仕度をした。ぼくは楊の木にのぼつた。そのとき吉郎が、たぶんあの上流の粘土が、足に

ついたためだったろう、みんなの前ですべてころんでしまった。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入ったりして、上流の青い粘土の根に上ってしまった。

「しゅっこ、来。」三郎は立って、口を大きくあいて、手をひろげて、しゅっこをばかにした。するとしゅっこは、さつきからよつぽど怒おこっていたとみえて、「ようし、見てろ」と云いながら、本気になつて、ざぶんと水に飛び込んで、一いっしやう生めいけん命、そつちの方へ泳いでいった。子どもらは、すっかり恐こわがつてしまった。第一だいいち、その粘土のところはせまくて、みんながはいれなかつたし、それに大へんつるつるすべる傾斜けいしゃになつていたものだから、下の方の四、五人などは上の人につかまるようにして、やっと川

へすべり落^おちるのをふせいでいた。三郎だけが、いちばん上で落
ち着^ついて、さあ、みんな、とか何とか相^{そう}談^{だん}らしいことをはじめ
た。みんなもそこで、頭をあつめて聞いている。しゅつこは、ぼ
ちやぼちや、もう近くまで行つていた。みんなは、ひそひそはな
している。するとしゅつこは、いきなり両^り手^てで、みんなへ水を
かけ出した。みんながばたばた防^ふい^せでいたら、だんだん粘^{ねん}土^どがす
べつて来て、なんだかすこうし下へずれたようになった。しゅつ
こはよろこんで、いよいよ水をはねとばした。するとみんなは、
ぼちやんぼちやんと一^{いち}度^どに水にすべつて落^おちた。しゅつこは、そ
れを片^かつ^たぱしからつかまえた。三^さ郎^{らう}ひとり、上をまわつて泳^{およ}
いで遁^にげたら、しゅつこはすぐに追^おい^つ付^ついて、押^おえ^さたほかに、腕^{うで}を

つかんで、四、五へんぐるぐる引っぱりまわした。三郎は、水を呑んだとみえて、霧をふいて、ごほごほむせて、泣くようにしながら、

「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と云った。子どもらはみんな砂利に上ってしまった。三郎もあがった。しゅつこは、そつと、あの青い石を投げたところをのぞきながら、さいかちの樹の下に立っていた。

ところが、そのときはもう、そらがいつぱいの黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、蟬ががあがあ鳴いていて、そこらは何とも云われぬ、恐ろしい景色にかわっていた。

そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と

思うと、まるで山つなみのような音がして、一ぺんに夕立がやってきた。風までひゆうひゆう吹き^ふだした。淵^{ふち}の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまうた。河原^{かわら}にあがった子どもらは、着物^{きもの}をかかえて、みんなねむの木の^き下へ遁げこんだ。ぼくも木からおりて、しゅつこといっしょに、向うの河原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈^{はげ}しい雨のなかから、

「雨はざあざあ、ざつこざつこ、

風はしゅうしゅう、しゅつこしゅつこ。」

というように叫^{さけ}んだものがあつた。しゅつこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足をひっぱられるようにして遁げた。ぼく

もじつさいこわかった。ようやく、みんなのいるねむのはやしについたとき、しゅつこはがたがたふるえながら、

「いま叫さかんだのはおまえらだか。」ときいた。

「そでない、そでない。」みんなは一しよに叫さけんだ。ペ吉きちがまた一人出て来て、「そでない。」と云いった。しゅつこは、気味悪きみわるそうに川のほうを見た。けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもう。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さいかち淵

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>